特別会員寄稿

文化庁文化交流使としての活動計画

作曲家 演奏家　笠松 泰洋

2018年度文化交流使指名書交付式写真

突然今年の年始に、文化庁から連絡がありました。私が文化交流使という立場に選ばれたので、2018年の4月から翌3月まで、1ヶ月以上、1年以内にどこでもいいので海外に行って、文化活動をして来て頂きたいという依頼でした。私は11月中旬から翌年3月まで活動する予定です。

この制度は、年に5人ほど各分野で活躍する人が文化庁に選ばれて、海外で文化活動、文化交流をするというものです。どうして私が選ばれたのかは、全く分かりません。応募するものでもないのです。ただ、この数年で、ダンサー・振付家の森山開次さんや、琵琶奏者の桜井亜木子さん、能楽師の津村禮次郎さんなど、一緒に舞台を作った人が選ばれていたので、話には聞いていました。一般市民とプロで一緒に創る音楽劇やダンス作品、若手の音楽家が参加して、ベテランと組んで作っていく舞台作品などに多く関わっているので、そういった活動が評価されたのかもしれません。

訪問先は、世界にある日本の在外公館に誰に来て欲しいか調査をしてあり、リクエストのあった国に、出来るなら行って欲しいと言われました。私には27カ国から要請がありました。まだ行ったことの無い、興味のある地域に行きたいという気持ちもある一方で、ヨーロッパでもコンサートを開いてみたい気持ちも強く、少々欲張って、南米のエクアドル、アルゼンチン、チリ、ペルーの4カ国、そしてロンドンとウィーンでコンサートを開こうと思い立ちました。全て要請のあった国です。私は作曲が本業なので、作った曲を音楽家に演奏してもらってコンサートを開くというのが、本来の仕事です。各国の音楽家と自作中心のコンサートを開き、自分の音楽を初めて会う音楽家がどう捉えるか、お客様はどう反応するか見聞きして、お互いに触発される面白い経験が出来るのではないかと思ったのです。

南米は、この1年ほどいろいろな仕事を一緒にやった作曲家でケーナ奏者の岩川光氏が、アルゼンチンを本拠地としているので、彼と一緒に（彼に助けてもらいながら）南米を回れたらと思い、弦楽四重奏とケーナのコンサートにしました。私に尺八と弦楽四重奏の作品があり、尺八を南米の楽器ケーナに置き換えることで、南米の人に興味を持ってもらえると思ったのです。エクアドルでは音楽大学の学生のカルテット、ブエノスアイレスでは歌劇場のオーケストラの団員、ペルーではオーケストラの若手の演奏家と、いろいろなタイプの方々と一緒にリハーサルをして、コンサートを開くことになっています。

ロンドンまではそのスタイルで、そして、最後に行くウィーンでは、2011年に東京文化会館などで上演した室内オペラ「人魚姫」を上演しようと考えました。初演で人魚姫を歌ってくださったソプラノ歌手の中嶋彰子さんがウィーン私立音楽芸術大学（MUK）の教授をなさっているので、相談したところ、大学のオペラ科にスコアを送り、図ってくれました。結果はやりましょう、ただしその条件は、英語のオペラにすること。そうすれば今後、この作品が世界で上演されるチャンスが出来るし、そういう作品であればこそ、大学の学生が参加する意義があるということでした。まさに願ったり叶ったり。目下、英語の歌詞と格闘中です。想像以上に大変な作業になりましたが、この先、自作のオペラやミュージカルを海外でも上演していけるようになりたいという野望がありますので、またとない修行・経験を積む場となっています。

所沢市民大学で音楽のクラスでも、この文化交流使の経験を活かせたらと思っています。